

## セミナー報告

## 第4回大学アーカイブズセミナー報告

平成28年3月11日 東北大学史料館閲覧室

平成26年度より、東北大学の大学史や大学アーカイブズに関する知見の公開と情報交換を目的に「大学アーカイブズセミナー」を随時開催している。第4回は科学研究費補助金（基盤（C）「黒田チカの生涯—最初の女子学生の教育、研究、人間、社会—」研究代表者黒田光太郎）研究会を兼ね、「黒田チカ資料の可能性」とのテーマ設定のもと2本の報告が行われた。

## （報告1）黒田チカ資料の日記・書簡から（要旨）

志賀 祐 紀（奈良女子大学大学院）

筆者は、2013年度に東北大学史料館に寄贈された「黒田チカ資料」のうち、手帳や日記帳などの冊子類、書簡（一部）の調査を行った。

冊子類については、昭和10（1935）年から昭和41（1966）年頃までの間に、黒田が使用していた手帳4冊、冊子状の卓上カレンダー3冊、並びに日記帳1冊を調査した。手帳には予定のメモなどが、卓上カレンダーと日記帳には日々の記録が簡潔に書かれている。それらに記された内容は自身の講演や実験の日程、学会や研究会への参加、同窓会への出席についてなど、多岐にわたっている。特に、多くの人物（真島利行、野副鉄男、金山らく、保井コノ、和田水、岡嶋正枝、林太郎など）との面会や会食についての記載が多く、多彩な交友関係が伺われる。そして、日記帳は昭和27（1952）年に書かれたものであり、他の手帳や卓上カレンダーと比較すると記述が詳細である。例えば、昭和27（1952）年に黒田はお茶の水女子大学と株式会社科学研究所（現在の国立研究開発法人理化学研究所の前身）を停年となっているが、そのことについても記されている。

書簡については、女子高等師範学校、東京女子高等師範学校、並びにお茶の水女子大学の出身者や教員などから黒田宛のものを中心に調査した。昭和20年代から40年代のものである。黒田はお茶の水女子大学には、その前身校より生徒として、教員として約60年もの長い間<sup>1)</sup>、在籍していたため、幅広い年代、様々な立場の関係者との文通があり、それらからは研究者としてだけでなく、卒業生として、教員としての黒田像を知ることができる。

以上のように、黒田の手帳や日記帳などの冊子類、書簡は、黒田について様々な視点からの分析が可能な資料である。今回は、黒田のお茶の水女子大学と株式会社科学研究所の停年と、教員としての黒田像の二項目について特に着目する。

## 1 昭和27（1952）年の日記帳から見る黒田チカの停年

## (1) お茶の水女子大学の停年

『お茶の水女子大学百年史』によると、昭和27（1952）年3月12日に「教授等停年に関する内規」が施行され、「本学の教授、助教授及び専任講師の停年は満六十五歳とする」と定められ、停年に達した時は、その日の属する学年末に退官することと規定された」という。そのため、同年3月に68歳となった黒田は退官することとなった。その年に書かれた日記帳には、次のような記述が見られる。

2月6日条「昼食後理科懇談会にて豫算に関する事委員に関する問題を討議す 停年問題を学

長より呈案されし旨報告あり」

3月8日条「保井氏辞表を出されし故 自分も出す方に話まつまり午後呈出に赴く 学長面会なりしか三時過呈出す」

3月12日条「昼食懇談会の時 停年制の検討をなす其前に保井氏及び自分より停職に関する意見を述ぶ 此会にては無事承認

午後二時半より教授会にて愈々停年制を検討。」

このように日記帳からは、2月に停年制が学長より学内で提案された後、3月8日には既に黒田は自ら辞表を提出しており、さらに、3月12日の教授会で停年について保井コノと共に意見を述べていたという経緯が明らかになった<sup>2)</sup>。

## (2) 株式会社科学研究所の停年

昭和27 (1952) 年8月1日、株式会社科学研究所 (第1次科研) の研究部門と生産部門の事業を分離し、新たに株式会社科学研究所 (第2次科研)、科研化学株式会社 (現科研製薬株式会社) が設立された。その時、株式会社科学研究所 (第2次科研) では、停年について規定が定められ、研究職員は原則として満60才が停年となる。国立研究開発法人理化学研究所所蔵の資料<sup>3)</sup>によると、昭和27 (1952) 年8月1日付で、黒田はかねてより研究員として在籍していた尾形輝太郎研究室の研究嘱託として採用されている。そのことについて、日記帳に次のような記述が見られる。

9月3日 (水) 条 「科研二分案結果停年制施行同時に残部の所員に対して辞令書発せられる (未停年者丈)」

9月19日 (金) 条 「尾形氏と桜井博士と私の辞令の件につき御尽力 赤平. 辻重役に交渉を始め頂く」

停年制が施行されたのは8月にも関わらず、そのことについては、日記帳の9月の頁に記されている。ちなみに、8月の頁には一切記載が無い。また、9月19日 (金) 条の「尾形氏」、「桜井博士」、「赤平. 辻重役」はそれぞれ、尾形輝太郎、桜井季雄、赤平武雄、辻二郎のことであろう。9月19日 (金) 条に書かれていることが仮に本来8月の頁に書くべきであったはずの事項であったとしても、記載通り9月のことであったとしても、いずれにせよ、株式会社科学研究所 (第2次科研) が設立された8月1日以降に黒田の辞令について尾形と桜井が重役に交渉するなどしており、8月1日の時点では黒田の処遇については決着していなかったようである。

## 2 手帳、書簡などから見る教員としての黒田チカ像

先述の通り、黒田の手帳、卓上カレンダーには、同窓会への出席についての記載が多数見られる。例えば、昭和31年卓上カレンダーを見てみると、3月28日 (水) 条には「卒業式30年記念クラス会 茗荷谷」、4月1日 (日) 条には「昼食は赤坂笹崎会館にて卒業後25年理科クラス会に出席」、6月3日 (日) 条には「伊達氏のクラス会卒業後40年 プリンズホテル (品川).」などと書かれている。また、明治39 (1906) 年に女高師を卒業してすぐに1年間だけ勤めた福井師範学校女子部の同窓会についても記載のある手帳もあった。このことから、黒田は教員として教え子たちとの交流を大事にしていたことが伺われる。

そして、東京女高師の卒業生から黒田チカ宛の書簡には、大学受験をした者からのものがかいつか見られた。例えば、昭和23 (1948) 年3月に東京女高師の理科を卒業し、昭和23 (1948)

年東北大学へ入学したA氏は大学入学直後の心境について記している。

(昭和23(1948)年4月21日付 A氏より黒田チカ宛書簡)

(前略) 大学もやっと始まりました。分析六時間 無機三時間 有機三時間 理論二時間 実験二十九時間というびっしりつまった講座が始まりました。どの時間にも希望をもっております。新しい気持ちで、しっかり勉強してまいりたいと思っております。男の方に混ってついてゆけますかどうか。一人前の科学者となることができますかどうか。危惧も不安もございませうけれど、やっと自分の希って居ました道につくことができたとおもいますと、ひとりで、にやにや顔の綻ぶのを感じます。無理を押し切って、我儘をしての学生生活でございませうので、茨の道でありますことは、覚悟の前でございませうけれど、今こそ深く悩み、大きく学んで、悔ない生涯を送りたいと思っております。

また、昭和22(1947)年3月に東京女高師の理科を卒業し、昭和24(1949)年に東北大学へ入学したB氏は、入学試験前の決意を綴っている。

(昭和24(1949)1月1日付 B氏より黒田チカ宛書簡)

(前略) 帰仙致しました後 まだ大学の方に御目にかかれませう 一日も早く様子を知りたく存じて居ります。家でも二十四年度の御一目標と致しまして私の入試に一同協力し祈願してくれて居ります。先生をはじめ諸先生方の御厚情にも御報ひ致したく入試突破を夢み祈って居ります。

このように、教え子からの書簡は形式的な状況報告や礼状にとどまらず、赤裸々な心情や現状が綴られている。日本初の女子大学生であり、日本で二番目の女性理学博士の黒田が教員だったことは、それだけでも東京女高師の生徒たちにとって大きな刺激であったであろう。さらに、黒田は教育者として学問を志す生徒たちを励まし、その道へ導いていたことがこれらの書簡からは推察される。

## おわりに

今回は黒田チカの日記帳や書簡の調査により、お茶の水女子大学と株式会社科学研究所の停年時の経緯がより詳細に明らかになり、そして、あまりこれまで注目されてこなかった教員としての黒田チカ像に光を当てることができた。また、黒田チカの日記帳や書簡などの資料は、交友関係、実験の経緯など、さらに新たな視点からの分析が期待できる。このように、「黒田チカ資料」は、黒田を知る上でも、お茶の水女子大学や東北大学、理化学研究所の歴史を知る上でも貴重な資料である。

〈付記〉

今回の報告にあたっては、お茶の水女子大学歴史資料館アカデミック・アシスタントの染井千佳氏、理化学研究所広報室史料室の野崎しのぶ氏、北海道大学大学文書館の山本美穂子氏をはじめとして多くの方々にご協力いただきました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 明治35(1902)年、女子高等師範学校理科に入学。明治42(1909)年、東京女子高等師範学校助教授に就任。昭和27(1952)年、お茶の水女子大学を退官。昭和38(1963)年まで非常勤講師として勤務。
- 2) 現時点ではお茶の水女子大学歴史資料館では、昭和27年3月の懇談会や教授会の議事録の所在は確認できていない。
- 3) 「履歴書労働者名簿」。財団法人理化学研究所「昭和二十一年度研究項目」。

## 黒田チカ資料の整理

－真島利行書簡を中心に－（要旨）

東北大学史料館 永田英明

### 1. 黒田チカ資料

本報告では、東北大学史料館が整理を進めている黒田チカ資料の真島利行書簡に焦点を宛てて、黒田と真島の師弟関係の有り様を資料から探ることを意図した。

黒田チカ資料はもともと豊島区駒込の黒田チカ邸に保存されていた資料で、本人の没後黒田吉男・黒田光太郎氏による選定を歴て福岡へ輸送され、その後2013年に至り東北大学史料館による選別へて仙台の東北大学史料館に搬入された。年代としては東京女子高等師範・お茶の水女子大学在職中のものが多くを占め、東北帝国大学時代の資料はきわめて少ない。

### 2. 真島利行書簡と『真島利行日記』

この黒田チカ資料中書簡は2000点以上を確認している。戦後のものが中心であるが、差出者は極めて多様で内容も年賀状のような簡単なものが多くを占めるが、その中で質量共に豊かに残されているのが、真島利行およびその関係者からの書簡である。

真島利行（1874～1962）は黒田の東北帝国大学在学中に指導教官となった、戦前期日本を代表する有機化学研究者で、東京帝国大学卒業後東大講師・助教授を経て1911年有機化学担当教授として東北帝国大学に赴任。1917年以降理化学研究所の主任研究員を兼ねた。1933年に本務を東北帝大から大阪帝国大学に移し、1943年には大阪帝国大学総長を務めている。黒田は1916年に東北帝国大学を卒業した後も2年間副手として真島の指導を受け、その後東京女高師赴任後は、理化学研究所に所属しやはり真島のもとで研究活動が続けるなど、長期にわたって直接的に黒田を指導した研究者であった。真島書簡の多さは、恩師真島との音信を黒田がいかにか重視していたかを示すものと言えよう。

尤も、黒田チカ資料中の真島書簡は、戦前期のものは実は少なく、昭和19年以降が78%、昭和24年以降のものが60%ほどを占める。時期的に詳しく見ると、大正期のものは理研での実験研究に関する指示で、昭和8～10年のものも黒田の研究についての学士院への紹介、研究補助等などが中心で、研究活動そのものにかかわる書類といえる。その様相が変わってくるのが戦争末期の昭和19年以降で、昭和20年の東京空襲で黒田が罹災した際真島が夫人の遺品を見舞品として贈呈して以降、研究に限らない、近況や心境を綴った「私信」が増えてくる。特に昭和22年頃までの書簡には、戦争末期・敗戦直後の真島の心境・思想やその変化を綴っており、極めて興味深い。なお真島については、東北大学史料館に『真島利行日記』が所蔵されている。日記は大正3年～昭和19年7月と昭和23年9月～34年（事実上は33年まで）が残されておりその間の昭和19年8月～23年8月が欠落しているが、黒田の書簡は残存部分で真島日記との照合が可能であるとともに、真島日記の欠落を部分的に埋めることができる資料としても、注目される。

### 3. 女子教育・女性科学者と黒田・眞島

黒田チカ資料中の眞島書簡には、戦後間もない頃にかかれた、眞島が戦後の女子教育や女性化学者の活躍に期待する旨を記したものが散見される。たとえば昭和21年6月10日眞島書簡には「兎角女子の文化向上のために益々奮励あらんことを偏に祈念仕候」昭和21年10月1日眞島書簡には「新時代に即応して女高師は先づ教へべきは女子の心がまへの改善向上だと存じます。其道の方々ですからすでに其方向に進んで居られると思ひますが何分よろしく御願申上ます。」と記され、昭和22年1月4日眞島書簡には「女子教育も大に变革せられアメリカ式となるようです益々御壮健でリードしていただくことを願ひします。丹下さんはアメリカに長らく居られましたので一層この際活躍されることを望みます。」と記される。丹下さんとは黒田と同年に東北帝国大学に入学した丹下ウメのことで、米国スタンフォード大学等での留学経験が長い丹下への期待を吐露している。

すると関連して興味を引くのが、戦後、眞島を囲む形での女性化学者の会合が、おそらくは黒田が主導する形で幾度となく開かれていることである。眞島書簡の昭和22年6月7日眞島書簡には、「また五月二十一日の会合は永く記念いたし喜ばしく存じて居ますが御集り下さった方々も益御壮健で我国女流の眞の向上のために永く御尽し下さることを祈って止みません。」と、5/21に開かれた会合に触れている。

昭和29年7月13日については、眞島書簡、眞島日記、黒田日記の三つに記録されている。黒田チカ資料昭和29年7月23日眞島書簡には「去る十三日にはお心づくしの会におまねきにあづかり女流化学者たちをはじめ安井さん達に御眼にかかり楽しき午後をすごしましたことを重ねて御礼申上ます」とあり、黒田チカ資料 日記(カレンダー)昭和29年7月13日には「御茶ノ水女子大学総長室にて眞島先生片山先生ご夫妻を中心に婦人の会を催す」云々。いっぽう眞島利行日記から 昭和29年7月13日「(前略)御茶の水女子大へ行く。黒田・阿武・保井・加藤等々の老女達と若い助教授十数名が主で片山氏夫妻も来て居られる。」云々とあり、写真も残っている。

黒田は晩年、日本婦人科学者の会の名誉会長など女性科学者の交流・地位向上を求める動きにも関わったが、それはこのような動きを踏まえたものでもあろう。